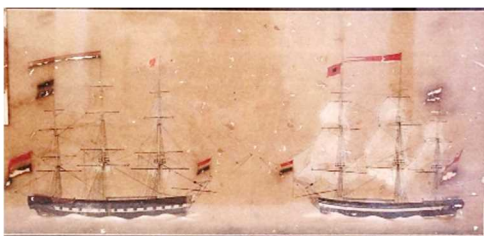


「大黒屋光太夫とロシア漂流」～種子島周辺のロシア船警戒～

西之表市史編集副委員長 鮫嶋 安豊

凡そ 200 年前、日本がオランダ・中国のみと通商していた鎖国時代のことである。種子島周辺は異国船の漂着が大変多く、その数 30 数件にも及ぶ。漂着船の大部分を占める中国（清国）船は沖縄経由でやって来たから、種子島はその要衝の地であった。種子島の人々は厳重に警護し、山川番所へ送り届ける義務が課せられていた。一方、北からやって来る国もあった。良港（不凍港）の少ないロシア国はオホーツク方面から蝦夷地（北海道）へやってきた。

1792 年北海道根室にロシア最初の公式遣日使節 A・K・ラクスマン一行を乗せた帆船が入港した。彼等の目的は日露両国間に友好関係を作り、貿易を開くことであった。その船にロシアの女帝エカテリーナ二世の命により日本に送還された 3 人の日本人（光太夫・磯吉・小吉）が乗船していた。彼らは天明 2 年（1782）乗組員 17 人で三重県白子から江戸へ向けて出帆中、駿河沖で遭難、漂流（7ヶ月間）、アムチトカ島（アラスカ）、カムチャッカ、オホーツク、イルクーツク・モスクワ、ペテルブルグとロシア国内を転々と連行され、最後にロシアの女帝エカテリーナ二世に謁見し、帰国願が許可され、10 年後、帰国となった人々であった。（17 人中、12 人死亡、2 人在ロシア、3 人帰国）。



阿蘭陀船之図（鉄砲館所蔵）

江戸幕府はその交渉に蘭学者桂川甫周を函館へ派遣し、ロシア事情をまとめさせる。さらに同乗していた光太夫らは幕府の詰問に終始、ロシアの好意を強調した。「ロシア人から厚遇されたのに何故、帰国したのか？」の質問に望郷の念をあげた。実は当時、イルクーツク（ロシア）には既に幾人もの日本人が居住しており、彼等もロシアの海岸に流れ着いた漂流民たちであった。しかし、彼等は日本語教師となったり、日本で禁教であったキリスト教（ロシア正教）を信じ、ロシアに

帰化した一世の日系ロシア人たちであった。この中に初の露和（薩摩方言）辞典を著した薩摩出身のゴンザラも含まれていた。この函館に入港したロシア船の記事が種子島側資料にも次のように散見される。

- 寛政 4 年(1792) 9/7 オホーツク出帆 10/7 根室到着 (『北槎聞略』)
- 寛政 5 年(1793) 6/8 函館着 6/21 第一回会見 6/24 第二回会見 光太夫らを引渡す 6/27 第 3 回会見 7/16 ロシア特使ら帰国 (『北槎聞略』)
- 同 年 長崎奉行より薩摩藩に異国船の警戒の令が下る 「波留志亜（はるしあ）國が長崎との交易を求めてきたが、長崎奉行はこれを拒否（「種子島家譜」）
- 寛政 6 年 (1794) 光太夫、磯吉、番町薬園に收容される (『北槎聞略』)
- 同 年 春、ロシア船は長崎へ来航し、通商を求めるが、オランダの通司により、全て対応。同年 2 月頃、種子島へも来航するという風聞があり。薩摩藩は硫黄島、甕島へ役人を派遣。(『新古見聞記 坤』)

また種子島家譜中にも（年月に 12 年の差異はあるが、）同一の内容が記されている。

- 文化 3 年(1806) (寛政六年 1794) 年号誤記か？ オロシア船が長崎に来着して通商を求めてきたが、これを許可しなかった。その前年に函館で発行した通商許可証を没収し、今後入港しないように諭した。しかし、今後も再来するかもしれない。万一、何処かの津に再来航した場合、防備を厳重にして、異国船の動向を察し、オロシア船の場合はよく納得させて帰国させること。万一、退かない場合は即刻追放せしめる事」と。(『種子島家譜』)

光太夫らを降ろしたロシア使節団は、函館で 3 回目の通商交渉を行ったが、長崎への廻航を促された。長崎奉行との会見に失敗し、通商を拒否され、追い返された。帰国した光太夫らはロシアに帰化することなく、ただひたすら帰国のみを念じ、その思いが女帝エカテリーナ二世の心を動かし、帰国できたのであった。光太夫らの帰国はまさしく間一髪、全くの幸運であったといえる。

参照『北槎聞略』桂川甫周著 岩波文庫『大黒屋光太夫』吉村昭著 新潮文庫「種子島家譜」「新古見聞記」



西之表市史編さんだより

『西之表市史』刊行！！

令和元年度から編さん作業を進めてきた『西之表市史』を、令和 6 年 3 月に刊行しました。予算の一部に再編交付金を利用しています。『西之表市史』は、B5 判の上下 2 巻(計 2,066 頁)で構成されています。目次、販売価格、購入方法については、本紙 2、3 面をご覧ください。



発刊のことば

西之表市長 八板 俊輔



西之表市民待望の『西之表市史』が発刊の運びとなりました。私たちはふるさとを学ぶ史書として、『西之表市百年史』と『種子島家譜』という先人の偉業を授かっています。この二つが記述していない領域に対象を広げることが今回編さんの眼目でした。

本市は、これまで歴史や民俗、自然、行政史をまとめた自治体史を刊行しておりませんでした。昭和 39 年に「西之表市史編さん委員会」を組織しましたが、その調査研究及び執筆にかかる膨大な時間と労力、財源といった課題から、編さんの対象を明治時代以降に絞ることとなりました。こうして完成したのが『西之表市百年史』であります。

平成 30 年、本市は市制施行 60 年の節目を迎えました。『西之表市百年史』発刊から半世紀、この間、社会情勢は変化し、かつての文化人、郷土をよく知る伝承者は段々と少なくなり、郷土に残された史資料や史跡の文化財的な価値の消失が憂慮される状況にありました。本市が有する豊かな歴史文化、自然という「島の宝」を失わないため、そして歴史を後世に継承し、将来のまちづくりや教育、市民生活に役立てることを目指して令和元年度から五カ年計画で『西之表市史』の編さんを進めてまいりました。

自然編は、種子島の大地、気候、豊かな動植物の世界、人と自然の関わりといったテーマでまとめられています。先史編から現代編では、多くの資料をもとに悠久の歴史を多角的な視点で捉え、それぞれの時代の生活の様子が理解できるように描かれています。校区史編は、本市にある 12 校区の成り立ちや歴史的特殊性をはじめ、年中行事や伝統芸能、伝説など民俗的な事柄がコンパクトながら、読み応えのある内容となっています。

『西之表市史』は、固有の歴史文化や文化財、自然に対する市民の誇りと愛着を深め、伝統文化や民俗芸能の保存保護に対する関心を高めることを目指しました。本書が今を生きる人々の心の糧となり、子孫の未来を映す鏡とならんことを。そして、調査研究の基礎資料として末永く活用されていくことを願ってやみません。結びに、刊行にあたり、御尽力を賜りました編さん委員会及び編集委員会並びに執筆委員の先生方、調査等に御協力いただいた関係機関・各位に対し心から謝意を表し、発刊のことばといたします。

# 『西之表市史』目次

## 上巻(第1～5編)

## 下巻(第6～8編)

### 第1編 自然

- 第1章 大地の成り立ち
- 第2章 西之表市の気候
- 第3章 生きものの世界
- 第4章 人と自然

### 第2編 先史

- 第1章 総論
- 第2章 旧石器時代
- 第3章 縄文時代
- 第4章 弥生時代・古墳時代相当期
- 第5章 特論

### 第3編 古代

- 第1章 古代の種子島
- 第2章 多嶺嶋停廃後
- 第3章 鎌倉幕府の南島支配

### 第4編 中世

- 第1章 種子島氏の系譜
- 第2章 鎌倉・室町時代の種子島
- 第3章 中世種子島の社会と文化
- 第4章 鉄砲伝来と種子島
- 第5章 戦国時代の種子島

### 第5編 近世

- 第1章 種子島の政治
- 第2章 種子島の経済
- 第3章 種子島家の外交
- 第4章 種子島の宗教
- 第5章 種子島の文化
- 第6章 種子島の庶民の生活
- 第7章 種子島の産業

### 第6編 近代

- 第1章 明治維新
- 第2章 廃仏毀釈と復興
- 第3章 種子島私学校と西南戦争
- 第4章 馬毛島
- 第5章 兵事
- 第6章 消防
- 第7章 衛生・医療
- 第8章 諸機関
- 第9章 西之表市の移住
- 第10章 太平洋戦争
- 第11章 産業
- 第12章 交通
- 第13章 教育
- 第14章 宗教

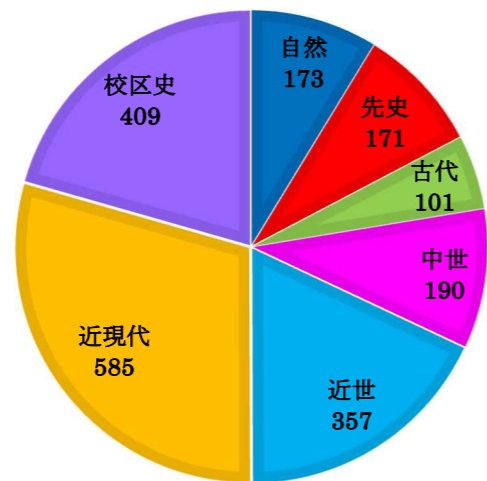
### 第7編 現代

- 第1章 西之表市の概要
- 第2章 行財政
- 第3章 議会・選挙
- 第4章 産業
- 第5章 構築(建設・土木)
- 第6章 衛生・環境

- 第7章 厚生・福祉
- 第8章 保健・医療
- 第9章 治安・消防・防災・災害
- 第10章 交通・通信・電力
- 第11章 教育
- 第12章 文化振興と文化財
- 第13章 年表

### 第8編 校区史

- 第1章 榕城校区
- 第2章 上西校区
- 第3章 下西校区
- 第4章 国上校区
- 第5章 伊関校区
- 第6章 安納校区
- 第7章 現和校区
- 第8章 安城校区
- 第9章 立山校区
- 第10章 中割校区
- 第11章 古田校区
- 第12章 住吉校区
- 第13章 方言



## ●市史の販売価格について

上巻・下巻セット 8,000円(税込)  
 ※上巻のみ、下巻のみの個別販売は行っていません。



## ●市史の購入方法について

### (1) 窓口購入の場合

販売場所：西之表市役所 3階 企画課歴史文化活用係  
 販売時間：平日の午前8時30分～午後5時15分

### (2) 配送により購入される場合(以下①～③の手続き)

#### ①購入申込み

- ・電話 0997-22-1111 内線 280
- ・ファックス 0997-22-0295
- ・メール [rekishi@city.nishinoomote.lg.jp](mailto:rekishi@city.nishinoomote.lg.jp)

のいずれかの方法により、注文者の「氏名」「郵便番号及び住所」「電話番号」「注文部数」をお申し付けください。

#### ②購入代金の振込

①の申込み完了後、以下の振込先へお振込みください(振込手数料は注文者負担)。  
 振込先：鹿児島銀行 種子島支店 普通預金 10015 西之表市会計管理者

#### ③配送

入金確認後、申しいただいた住所宛に郵送いたします(送料は購入者負担)。

『西之表市史』は西之表市HPでも公開を予定しています。

## コラム 近現代部会

## 歴史史料のデジタル化推進に期待します

森 友和



左の写真は、故下村達雄氏(小牧)所蔵写真から複写した島津幸子(後の種子島久尚[1854・1882]夫人)の画像です。幕末から明治に撮影された女性の写真は非常に珍しく、少しでも歴史に親しみ易くなるようデジタル処理でカラー化を試みました。

西之表市の歴史史料は、度重なる西之表市・鹿児島市の戦災火災で多くが焼失して、種子島家が所蔵していた貴重な歴史的財産もほとんど燃えて無くなりました。

そこで、様々な理由で島外に持ち出され、日本各地に散失した歴史史料を収集する力となったのがデジタルデータでした。国会図書館・地方自治体、更に大学や民間団体の図書館及び博物館など、島外各地域で保管されている文献等を検索閲覧出来たことが、市史の原稿作成に大きく役に立ちました。

その事を考えると、西之表市が保有する史料にも島外の方々に関心を持つ文献が多数あるはずで、西之表市が目指す「種子島の有する奥深い歴史や文化に触れ、来訪者と市民、島民が交流を行う」活動を推進するためにも、西之表市史をホームページなどの電子媒体で公開する事はもとより、鉄砲館等が保有する貴重な資料も検索可能とし、来島する動機の一助ともなることを望みたいと思います。